

## 日本語教科書の会話に見られる言いよどみ

堀口純子 (筑波大学)

### はじめに

1980年代に入って日本語学習者の増加と多様化、それに社会の変化にともなって、日本語教育においても学習者のコミュニケーション能力の養成が急務になり、その要請に応じて、1985年頃から出版された日本語の教科書の会話には、会話研究の成果が生かされたものが多くなってきた。以下にいくつか例をあげてみよう。(下線は筆者による)

(1) ねえ、金曜日の晩、飲みに行かない? (JFY 2課)

(2) 山下：あのう、すみません。

通行人A：はい。 (SFJ 12課)

会話は話し手の話しかけから始まるが、それは相手に唐突な感じを抱かせるようなものではなく、聞く用意をしようと思わせるようなものでなければならない。(1)(2)は、注目要求の「ねえ」「あのう」「すみません」などによって、会話のための場を作ろうとしている例である。

(3) ヤン：「こんにちわ」ってあいさつただけで、「日本語が上手ですねえ」ってほめられることがあるでしょう。私はあれがいやでしょうがないの。

ブルース：そうそう。 (JFY 11課)

(4) 女子学生：けさあなたに荷物が来たから、

シャルマ：ええ。

女子学生：事務室へ取りに来てくださいって。 (SFJ 5課)

会話は、話し手が話し、聞き手がそれに反応を示し、その聞き手の反応にまた話し手が応じる、というような過程をたどりながら成立する。(3)(4)は、あいづちの「そうそう」や「ええ」によって聞き手が反応を示している例である。

(5) A：学校を作って若い人を教育することにしたんです。

B：じゃ、学費は無料? (総合初中 6課)

(6) 鈴木：単純骨折だからすぐなおるって、医者が言った。

リサ：で、いつごろ退院できるんですか。 (SFJ 22課)

話し手と聞き手は、役割を交替しながら会話を進めていく。(5)(6)は、それまで聞き手だった人が談話表示の「じゃ」や「で」によって、自分の話の方向を示しながら話し手になろうとしている例である。

このように、この10年ほどの間に作られた教科書の会話には、できるだけ現実の会話に近く自然であるように、工夫がこらされている。しかし、一方では教科書にはいろいろな制約があるため、会話の場面が制限され、また学習者の負担が過度にならないように配慮されている。その結果、上の例で見た「ねえ」とか「あのう」とか「ええ」とか「で」や、あるいはその他に「ああ」「んー」「まあ」など、会話ではよく使われるが具体的な内容を伝えるのが役割ではない言語表現は、取捨選択され、あるものは削られてしまう。

本稿では、日本語教科書の会話作成過程の中で、必要性は認められながらも最終的には削られてしまうことの多い言い淀みを取り上げ、日本語教育における言い淀みの扱いについて考えてみたい。

## 1. 言い淀み

言い淀みは話しことばのみに現れ、しかも話しことばにはかなりの頻度で現れる。

(7) A: 次の交通ニュースは アノ 12時25分ごろお伝えします。

B: アノはいらないんだよ。 (1998年2月25日 TBSラジオ ゆうゆうワイド)

(7)のAは原稿を前にしているのだが、それでも「アノ」という言い淀みが現れている。このように原稿があってもそれを話すように伝えようとする、言い淀みが現れることは珍しいことではない。

言い淀みとして使用される言語形式は、「でもー」のように語尾の母音をのぼす、「でも、オー」のように語尾の母音を言い直してのぼす、「エー」類、「アー」類、「ウー」類、「ンー」類、「アノ」類、「マ」類、「ナント」類、「ソウ」類、「ナニ」類、「ヤッパリ」、「ナンカ」など、多様である。

言い淀みが出現する位置は、①話し手が話している最中、②聞き手が話し手からターンをゆずられた時、③聞き手が自分からターンを取ろうとする時である。

言い淀みは基本的には沈黙をさけるために使用されると考えられるが、出現位置によってさらに異なる役割が見られる。①の話し手が話している最中に現れる言い淀みは、ターンを保持するために使用されるもので、(7)はその例である。②の聞き手が話し手からターンをゆずられた時に現れる言い淀みは、ゆずられたターンを受けて話し手になる意志を表すものである。例えば、質問に対して答えではなく言い淀みが現れた場合、それは質問を理解したり答を考えたりまとめたりする間の沈黙をさけるために使用されているのであるが、それは同時にこの後に質問に対する答えが続くということを示唆させる。③の聞き手が自分からターンを取ろうとする時に現れる言い淀み

は、それによって話し手になるきっかけをつかむために使用される。

②③の位置に現れる言い淀みは、相手の発話の後に現れて、新たに話し手になるために使用されるものである。これは話し手になるためという点では会話の場作りのために使われる注目要求に通じるところがある。したがって、言語表現も言い淀みと注目要求の両方に使われるものがあり、例えば(1)(2)で注目要求として使われている「ねえ」や「あのう」などは、言い淀みとしても使用される。

このように言い淀みは、具体的な内容を含まない言語表現によって、まだ話し続けたい、あるいはこれから話し始めたいという意志を表し、その結果、相手には聞き続けることを、あるいは話すのをやめて聞き手になることを促す。

## 2. 日本語教科書の会話の言い淀み

1988年から1992年の間に出版された以下の5種類の教科書の中の会話で使用されている言い淀みについて見ていく。(本文中では教科書名は〔〕内に示した略称を用いる。)

JAPANESE FOR YOU [JFY] (大曾美恵子、小山揚子 1988 大修館書店)

新日本語の基礎 [きそ] (海外技術者研修協会 1990)

総合 日本語初級から中級へ [総合初中] (水谷信子 1990 凡人社)

SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE 1,2,3 [SFJ] (筑波ランゲージグループ 1992 凡人社)

コミュニケーションのための日本語入門 [コミュ] (能登博義 1992 創拓社)

どの教科書もすべての課に会話があるが、そのうち言い淀みが使用されている課および使用頻度は表1に示す通りである。

表1 会話に言い淀みがある課の数と言い淀みの使用頻度

	JFY	きそ	総合初中	SFJ	コミュ
総課数(課)	12	50	15	24	15
言い淀みのある課数(課)	9	7	2	23	4
言い淀みの使用頻度(回)	14	9	5	68	5

どの教科書にも言い淀みが提示されているが、いちばん少ない総合初中では15課中2課に、いちばん多いSFJでは24課中23課に言い淀みが使用されていて、教科書によってかなり差がある。使用頻度を見ると、SFJでは1つの会話で3回位使用されている計算になるが、他の教科書では1つの会話で1~2回程度で、日常の自然な会話に比べるとかなり少ない。

教科書で使用されている言い淀みは13種類で、表2に示す通りである。

表2 教科書で使用されている言い淀み

	JFY	きそ	総合初中	SFJ	コミュ	合計
あの	1		1	27		29
あのう/あの一	5		1	6	3	15
あのね			1			1
ええ	1			1		2
ええと/えーと		5	1	24		30
ええとね				1		1
うん			1			1
ううん/うーん	3	1		3		7
そうですね	1	3		2	1	7
そうね				2	1	3
まあ	2					2
いやあ				1		1
繰り返し	1			1		2
	14	9	5	68	5	101

5つの教科書で使われている言い淀みは、13種類である。そのうち「イヤア」と繰り返しは次のように使われている。(下線は筆者による)

(8) リサ：どうですか、具合は。

鈴木：いやあ、足の骨、折っちゃってね。(SFJ 22課)

(9) マイク：粗大ごみって、何ですか。

渡辺：粗大ごみって、…うちのお父さん。(JFY 10課)

言い淀みが現れる位置は、話している途中、ゆずられたターンを受ける時、自分からターンを取る時のどの例もあるが、ターンをゆずられて受ける例が圧倒的に多い。

### 3. まとめ

本稿で対象にした日本語教科書の会話では、言い淀みが全く無視されている教科書はなかったが、日常の自然な会話に比べると、頻度も種類も少ない。頻度に関しては、特に話している途中やターンを取るための言い淀みの例が少なく、また種類に関しては、「ナニ」類や「ヤッパリ」「ナンカ」などは提示されていない。

現場に立つ教師は、教科書に書かれていることだけではなく、教科書という制約のため何が削り落とされているのかという点にも意識を向けなければならないが、言い淀みに関しては上で述べたことが留意すべき一つの点であろう。